本と、人と、つながる縁

神戸大学大学院人文学研究科博士後期課程　石橋知之

一　三木家と本をめぐる人々

三木家とその蔵書

播磨国神東郡辻川村には代々姫路藩の大庄屋を務めた三木家が屋敷を構えていました。現在は宿泊・飲食施設となっていますが、今もその遺構を残しています。三木家には江戸時代以来の膨大な古文書群が残されていて、福崎町の歴史を探るうえで重大な手がかりを現代に伝えていますが、古文書の他に蔵書、すなわち古典籍もまた膨大に納められていたといいます。

柳田國男が幼少期、三木家に預けられたとき、同家の蔵書を耽読しその学知の基礎を養ったというのは有名なエピソードです。三木家蔵書の内実を記す「観生堂蔵書目録」は約七三〇点四二〇〇冊の書籍を載せており、中には稀少な写本類などもみられます。

それらの蔵書は三木家代々が並々ならぬ努力で蒐集した知の結晶であるといえます。今回はこの三木家蔵書から、本と人のつながりをテーマにお話をさせていただきます。

三木家はどのようにしてこれほどの蔵書を集めたのでしょうか。そもそも、江戸時代とはどのように本が流通しているものなのでしょうか。現代のようにネットショッピングで簡単に本を入手できるわけではありません。また、本は買って読んで終わりではなく、知人に貸すこともあれば、古本として売りもします。本は人から人へ、多くの手を経て循環していきます。三木家蔵書を題材に「本をめぐる人々の交流」や「江戸時代の本の流通」について考えてみましょう。

（挿図一）三木家蔵書の一部

三木家から本を借りる人々

ここでは三木家の中でも短命の秀才として知られた七代当主通深（一八二四～五七）の時代に、彼と彼をとりまく学者や本屋との間で交わされた手紙（『福崎町史』第四巻所収）の内容を取り上げていきます。

三木家には周辺地域の学友や役人、上方や江戸の学者からの手紙が多く残っていますが、その中に篠崎小竹（一七八一～一八五一）の手紙があります。篠崎小竹は尾藤二洲や古賀精里に学び頼山陽らと交流した大坂の儒学者です。通深とも交流があったようですが、手紙のなかで『東征稿』と題された本の借用を依頼しています。

『東征稿』とは大坂を代表する学舎懐徳堂の儒学者中井竹山が著した紀行文で、明和九年（一七七二）、竹山が近江宮川藩主堀田出羽守正邦に随伴した折、京都から江戸までの道中で詠んだ漢詩を収録した本です。学問が盛んで本屋も多く立ち並ぶ大坂に住む小竹が、わざわざ遠く離れた三木家を頼るほどですから、簡単に入手できる本ではなかったとみえます。どのようにして三木家はこの本を入手できたのでしょうか。

このことを探る手がかりとして、天保一〇年（一八三九）、通深が当時の懐徳堂の教授であった中井碩果からこの本を借用した旨を伝える手紙が残っています。碩果は竹山の孫にあたる人物です。通深は天保九年に父通明とともに上方各国を巡歴する旅をしており、その途中、懐徳堂で碩果に謁見し入門の礼を取っています。懐徳堂の門下生であった通深が教授碩果から直接本を借りたのです。『東征稿』の出版が確認できるのは嘉永六年（一八五三）ですが、通深はこの本を写本で所持していました。小竹が『東征稿』の借用を願い出た年代は不詳ですが、同本の出版以前とみてよく、市井にはまだ流通していなかったのです。

三木家は中井家、あるいは懐徳堂の稀少な本を入手できる関係性を有していたわけです。この他にも通深が中井家より本を借りていた記録が『福崎町史』第四巻にいくつか掲載されています。なかには門外不出の秘蔵書を借りようとして断られている事例まであります。通深は熱心に中井家関係本を蒐集していたのです。そして、小竹のように三木家と懐徳堂の関係性をあてにして本を借りに

来る人もいたのです。

本の借り主、木村藤一郎

もう一人、三木家に本を借りにきた人物を紹介します。木村藤一郎という人です。彼は一二月六日付の手紙で三木家から借用していた『英城記』と『河野家譜』について役務が多忙のため写しきれず、借用の延長を願い出ています。どちらも三木家のルーツにまつわる書物で、これも同家特有の蔵書といえます。また藤一郎は同じ手紙の中で「中井履軒経説之著述類」を拝借したいと願い出ています。履軒は竹山の実弟にあたる人物ですが、藤一郎は借用を希望する理由を「当地中井家之著述類一向無之」と述べており、中井家関連本が当時この地域では入手しにくかったことがわかります。

「観生堂蔵書目録」をひらくと、竹山の著作として有名な『草茅危言』や『逸史』のほか、履軒や中井竹山の子中井蕉園の著作など、多くの中井家関連本が目につきます。播但地域で学問を志す者たちの間で、三木家は中井家の学問に触れる貴重な経路として大きな意味をもったのです。

さて、この木村藤一郎という人物は何者なのでしょうか。彼の正体を知りうる史料があります。江戸時代、広大な幕府領支配を任されたのは全国各地に派遣・配置された代官たちですが、その代官に従事する役人たちを総覧した『県令集覧』という史料をみると、木村藤一郎の名が生野代官所地役人として確認できます。生野代官所は銀山運営を管轄する幕府の重要拠点であったため、主たる代官所構成員の他に現地登用した役人を特別に置くことを認められていました。それが地役人です。木村藤一郎は天保一〇年には竹原野口役（銀山に出入りする人の検問や鉱物の搬出入の警備番役、竹原野口を担当）を務めており、嘉永元年（一八四八）以降は地役人の中でも最上位の役職である御運上蔵役を務めていたことが確認できます。

藤一郎は銀山運営の中核を担う一方で、学問の面にも秀でた人物でした。生野では天保一三年に出石藩の儒学者桜井東門の子桜井石泉を教授に招き、学問所尊性堂（のち麗澤館と改称）を開きましたが、木村藤一郎はこの学舎の助教を務め、翌一四年には教授に昇進しています。尊性堂には地役人や銀山運営を担った山師のほか、掛屋や郷宿など代官御用の請負人らとその子弟が集まり学問に励みました。いずれも生野銀山の行財政を担う存在で、尊性堂は学問・教養を身につけ、役務を担う人材を育てる場として大きな役割を担ったのです。

生野地役人と三木家

以上にみたように、木村藤一郎は生野銀山の運営・学問振興の両面において中心的存在でした。彼はいかにして辻川村の三木家と関係をもつに至ったのでしょうか。その手がかりは藤一郎から通深宛ての別の手紙から読み取れます。三月二六日付の手紙の中で、通深は「今般も帰路伺候仕度」ところ、雨天の旅中にて訪問できなかった旨を詫びています。藤一郎は何らかの役務で辻川村付近を通行していたとみられますが、石川準吉著『生野銀山と生野代官』（日本工業新聞社、一九五九年）をみると、藤一郎の当時の動向を推定することができます。

同書によると、木村藤一郎が「御銀登り」のため弘化三年（一八四六）三月一四日に生野を出発した記録があるといいます。「御銀登り」とは生野銀山で産出し製錬した灰吹銀を大坂の御金蔵へ輸送する役務のことで、地役人の重要任務の一つでした。辻川村は古来より生野から飾磨方面へ向かう交通の要衝です。辻川村周辺の支配を姫路藩に任された三木家宅には藤一郎のような「御銀登り」の生野地役人が度々来訪していたのでしょう。

また同じ手紙の中で藤一郎は「県令転換前後吏務繁冗ニ而」と述べています。ここでの県令とは代官を指すので、つまりこの手紙が代官交替の頃のやりとりとわかります。日付から推測すると、県令転換とは弘化三年二月二八日、勝田次郎代官の入陣を指すとみられます。勝田代官について藤一郎は「跡県令も読書家と申噂ニ而、既ニ今般も彼是書物買入相成候、無程入陣ニも可相成、何卒学問所一盛仕度岐望罷在候」と述べています。

江戸時代の代官は頻繁に交替があったことが知られていますが、代官の動向次第では業務内容やその地位の命運を左右されうる現地の地役人たちは、敏感に次期代官の品定めをしていたのでしょう。藤一郎にとって代官を評価する基準の一つが読書家か否かであったことは興味深い点ですね。

藤一郎の手紙は学問所や桜井家に関わる内容のものが多いですが、このほか三木家に残された手紙には出石藩の仙石騒動や近隣各地の火事発生など、世上の風聞や情勢にまつわる内容がよくみられます。三木家にとって諸人との交流は情報収集の意味もあったのです。

読書でつながる点と線

三木家には藤一郎の他にも、渡辺角太夫、浅田州平、浅田大伍郎、小国幸助ら生野地役人との手紙が残されています。今回は木村藤一郎のものしか発見できませんでしたが、「御銀登り」のような役務を通して交流の機会を得た彼らは、その関係を私的世界まで広げ、本の貸借などの文化的交流を積極的に図っていたのでしょう。

また三木家蔵書の大きな特色といえる中井家関連本の充実は、大坂の著名な儒学者や生野学問所の教授格の人物が三木家に本の借用を頼ってくる状況を生じさせていました。通深が懐徳堂との関係を積極的に活用し、形成した蔵書はそれほどの価値があったのです。懐徳堂から三木家、三木家からその学友へ、本は巡り、筆写されて広がっていきました。江戸時代の学者や文人は、彼ら自身が知の拠点として各地に点在し、それぞれが知的交流の線で結ばれていましたが、その線上を本が行き交っていたのです。

二　江戸時代の本屋の営み

姫路の本屋さん

ここまでみてきたのは貸借関係に基づく本の広まりでしたが、当然、三木家は本屋からも本を購入していました。『福崎町史』第二巻・『姫路市史』第四巻にも取り上げられていますが、三木家が主に本を購入した店は姫路の本屋、灰屋でした。

江戸時代の出版業は一七世紀中頃から三都を中心に発展し、時代を経るにつれて地方にも広がりをみせたため、一九世紀にもなると全国各地の城下町等で本屋の営業が確認できるようになります。通深の代に頻繁な取引がみられるのは姫路の灰屋長兵衛と名乗る本屋です。灰屋は一八世紀末～明治初期まで営業活動が確認できます。出版のほか貸本業や古本売買、製本の受注や書画類・文具類の取扱いなど幅広く営業していました。行商も盛んに行っていて、その販路は播但二国をはじめ美作国津山方面にまで広がっていました。現代ならば出版社、書店、古本屋は分業していますが、江戸時代の本屋は製作・流通・販売と、本に関わるあらゆる仕事を一手に担ったのです。

（挿図二）襖下張り文書調査の作業風景Ⅰ

襖から覗く本屋の営み

灰屋の営業実態については先に紹介した二つの自治体史の叙述を除くと、ほとんど明らかにされていません。『福崎町史』に掲載された三木家から灰屋長兵衛に宛てた手紙は、灰屋の営業実態の解明に迫る上で第一級の史料といえますが、近年新たな史料が発見されました。

二〇一九年一〇月、三木家住宅のうち主屋以外が指定管理となり、宿泊・飲食施設にするための改修工事が行われることになりました。これに伴い副屋・離れの襖の下張り調査が実施されました。襖の下張りには反故となった古文書が再利用されることが多く、そこから江戸時代の貴重な史料が発見されることもあります。今回行われた襖の下張り調査では三木家宛ての灰屋の手紙の断片が数点発見されました。この断簡から新たに判明した灰屋の営業実態をここでは紹介します。

本の世界の「交易」

まず紹介するのは弘化四年（一八四七）、『汪份増訂四書大全』をめぐるやりとりです。通深はこの本の売却の相談を灰屋長兵衛（以下、灰長）にもちかけています。四書とは大学・論語・孟子・中庸の四つの書のことで、朱子学を興した朱熹によって重要視された儒学における代表的なテキストです。本書は清の汪份なる人物が増訂した四書の揃本で、八帙に及ぶ大部の本でした。四両二歩の売価にて三木家より相談をもちかけられた灰長は「同書は極上本ですが、もはや大学・中庸だけを分冊した和刻本も出来るほどに世間では四書は流通していて、いずれ唐本（中国で開版された本、和刻本より高価だった）でも価格が下落するでしょう」と市場の状況を説明し、買い手を見つけるにはもっと値下げすべきと提案しています。さらに「最初に購入した本屋へ持って行き、値引きで引き取ってもらうのはいかがでし

（挿図三）襖下張り文書調査の作業風景Ⅱ

ょうか」と続けています。

ここで興味深いのは、三木家が売り払いたい古本を灰長が買い取るわけではないという点です。あくまで買い手を探す仲介人として灰屋はこの一件に係わっているのです。その後の手紙をみると、『四書大全』は姫路では買い手が見つからず、大坂の本屋に掛け合ってやっと買い手を見つけたようです。しかし大坂の本屋は三木家の希望売価より安値を提示しており、灰長は「不利な交渉ではありますが、他に買い手の見込みがないため、さっぱり見切りをつけて売ってはいかがでしょうか」と説得を試みています。

古本を単に買い取るのではなく、買い手の捜索や値段交渉もまた本屋の仕事だったのです。いわば本売買の仲介人のような商売を江戸時代の本屋はしていたわけです。

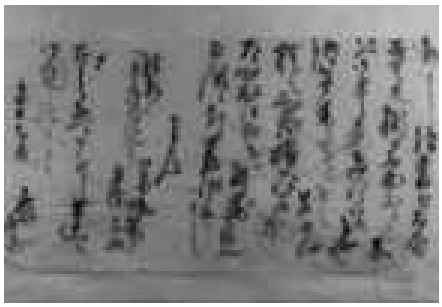
この点をさらに掘り下げて考えるべく、次に『漢魏叢書』をめぐる三木家と灰長のやりとりをみていきます。『漢魏叢書』は、明代に編纂された前漢・後漢代および魏晋南北朝時代の様々な著作を収めた漢籍叢書です。『福崎町史』第四巻には同本に関連して通深より灰長宛ての手紙が収録されていますが、今回の調査ではその返信にあたる灰長から三木家宛ての手紙の断片を発見できました。両史料の内容を照合すると、ここでも通深が本の売払いを灰長に相談していた様子が詳細にうかがえます。

通深は『漢魏叢書』について「先日の「交易本目録」の中に挙げていましたが、この書は不用になったため「交易」はせず売り払おうかと考えています。どこへでも結構なので二両にて売り払いたく思います」と述べています。

ここで「交易」という言葉が登場します。また「交易本目録」なるものを通深は灰長と共有していたとみられますが、この「交易」とはつまり本同士の交換のことです。

江戸時代、本屋間での商品仕入れの卸売り取引では「本替え」といって、現物交換で金銭の精算を代替する商慣習がありました。この事例の場合は顧客間での本の物々交換を灰屋が斡旋していたことになります。『四書大全』の事例も踏まえると、三木家は古本を手放すとき、すぐに金銭に換えてしまう場合と、交易本として出品し別の希望する本と交換する場合があったことになるのです。交換する本同士の間で価値に差がある場合、その差分を金銭で補っていたようです。

別の手紙をみると灰長が複数の書名を挙げ、「これらは先日頂戴した「御交易被遊度御書付」に記された本のうち、この頃「払物」（古本）として出品されたものです。交易を希望する場合は「替り本」（交換対象となる本か）を一部ずつ送ってください」と述べています。この叙述から推測すると、三木家側が入手したい本のリストが灰長には渡されていて、そのリスト上の本が古本市場に流れてきたとき、灰長は三木家にその情報をまわし購入を打診していたと考えられます。まさに本の「交易」です。江戸時代の本屋は本の交易仲介人という一面をもっていたのです。



（挿図四）調査で発見された古文書の断簡

本の「嫁入り」

以上、江戸時代の本屋の営みについて、三木家と灰屋のやりとりの中からみてきました。最後にもう少し『漢魏叢書』のゆくえを追って、この文章を閉じたいと思います。

『漢魏叢書』はなかなか買い手が見つからなかったようです。先ほどのやりとりの続きとみられる手紙で灰長は『漢魏叢書』について「決して等閑にしているわけではないが、精々心がけて「嫁入口」を探しております」と述べています。また別の手紙でも「昨秋より探している漢魏叢書について所々へ尋ねていますが、すぐには「嫁入り」できそうにありません」と述べています。灰屋は日頃から取引のある大坂の本屋、秋田屋太右衛門にも掛け合いましたが、値段交渉が上手くいかなかった旨を三木家に伝えています。本に買い手がつくことを「嫁入り」と称しているのです。

本は人から人へめぐり、様々な読者の手を渡ります。顧客から別の顧客へ、本の売買を取り次いだ江戸時代の本屋は仲人のようなはたらきをしたのです。売りに出した本が別の人の手に貰い受けられていくさまは、元の所蔵主や本屋にとって、さながら「嫁入り」のように感じられたのでしょうか。今回見つけた史料では辿れませんでしたが、『漢魏叢書』の嫁入り先が無事見つかったことを願いたいものです。